水田・畑・果樹園を基礎とした
―私の酪農経営―

秋田地方連盟・秋田酪青研
内藤専悦

この記録は、北日本酪農青年研究連盟の研究発表会の席上発表されたもので、同君の経営に対する本すじは通っており、酪農経営による水田反収の増加、果樹園下草栽培の効用、自家食料の改善等、総合生産力が堅実に伸びている点は立派な成績であって同君の努力に深い敬意を表すると共に全国の同志の方々に御紹介いたします。

編集部

▽……△

一　発表の概略

昭和二十六年、困難な家庭事情のもとに、若くして経営の主体者となった私は、伝統的な水田単作の農業形態を、グループと手をつなぎ、役場や組合の補助、指導を得て酪農を取り入れ秋田県の事情として困難な水田裏作に青刈飼料を始め、果樹の下草を牧草化し雑穀畑を輪作飼料畑とし、搾乳牛二頭の牛乳と堆肥、尿、さらに豚の繁殖を取り入れて、畜産収入を高め、水田反収を高めたその経営を、皆さまの前に披瀝し、将来の理想的設計を描いてグループと共に前進しようとするものであります。

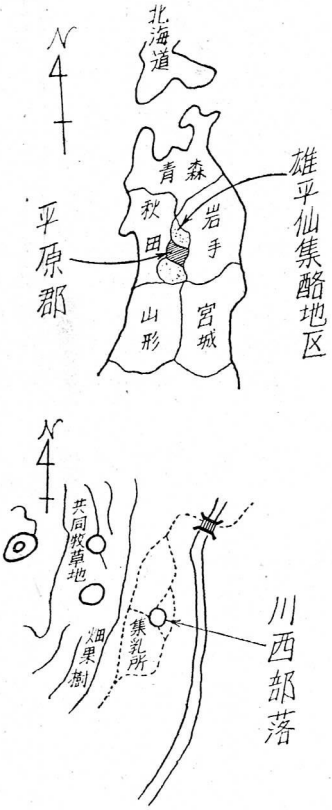
二　わが家の環境と諸条件

イ　部落の位置

秋田県の中央よりやや東南、雄物川に沿った盆地に私共の部落があります。（図一）

ロ　営農上の諸条件

東側を雄物川が流れ、水田は砂質の乾田であり、すぐ西に山がせまり、二〇度の傾斜面に畑、果樹園、牧草地があります。（図二）、多雨多雪、寒暖の差が激しく、永年、水田単作経営を続けてきたところであります。



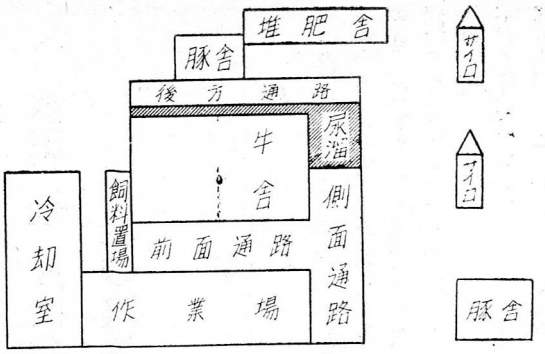
第１図

三　わが家に酪農を取り入れた動機

昭和二十六年、父の死と共に当時二十三歳の私は、八〇歳の老人と女、子供ばかり一〇人の家族と、六〇万円の借金を、田畑と共に受継ぐことになりました。経営面積三六八㌃（三町六反八畝）（第一表）のうち、果樹園、畑等の一五〇㌃（一町五反）は戦後山腹を開拓したもので肥料代も赤字になるほどの低い生産力しかありませんでした。従って水田のみ経営の主体であり、当時平均反収四五〇㌔㌘（三石）程度で売渡米五、四〇〇㌔㌘（三六石）約三六万円の現金収入しかなく、購入肥料は五四、〇〇〇円を費しております。そこで今までの経営を反省し、土地を最も有効に活用する事を考え堆厩肥を増産し、土地に還元し、老朽化した水田を有機化しようと試み、まず、手始めに豚の繁殖に取りかかりました。二頭の優良豚を入手し、年二回の繁殖を始めたところ相当の収入をあげることができ将来に明るい希望を持ちました。三十一年九月、私たちの部落も含めて、雄平仙集約酪農地域の指定を受け、県始め町、農協こぞって酪農の奨励を呼びかけられました。しかし永年伝統的に受けつがれてきた水田単作の経営形態を、一挙に酪農へ転換させることは並大抵の努力ではできないことを知りました。思い切った頭の切替えと勇気とさらにねばり強い実行力が必要でした。

四　酪農経営の概況

いろいろ研究してみた結果、酪農に切替えて、これを成功させるための秘訣は、最大限可能なだけ思い切った投資をすることに気がつき、三十一年十二月まず二頭の分娩間近かな妊娠牛を導入しました。さらに改良牛舎サイロ二基、尿溜、堆肥溜、吹上カッターをそれぞれ補助融資を得て設置しました。第一年目の三十二年度、直ちに飼料の自給計画を立て、搾乳牛二頭と育成牛一頭を飼養し、畜産収入の面で第二表のような成績を収めました。三十三年度の経営概況と、酪農施設は第三表、飼料作付の状況は第三図の通りであります、これらの給与法は第四表Aの通りで、これらの自給飼料を生草に換算すると一八・八㌧（五、〇〇〇貫）になり、ほかに購入飼料を第四表Bの如く、一、〇六五㌔㌘（二八五貫）与えることにしました。搾乳量は第四図の如く三十二年十月より一カ年間八、一五〇㌔㌘（四三石五斗）であり、このうち自家用として毎日三・七五㌔㌘（二升）年間一、三七〇㌔㌘（七石三斗）を飲用に回し、家族の健康



第2図 酪農施設

第1表 私の経営

田		198アール	(1町9反8畝)
蔬菜畑		20アール	(2反)
戦後の開畑	幼木果樹園	40アール	(4反)
	雑穀畑	70アール	(7反)
	野草地	40アール	(4反)
計		368アール	(3町6反8畝)

第3表 (33年度)

A 経営規模

田	畑	果樹	飼料畑	牧草畑	農業従事者 20歳～30歳	農業従事者 16歳～20歳	搾乳牛	繁殖豚	育成豚	仔豚
アール 198 反 (19.8)	アール 20 反 (2)	アール 40 反 (4)	アール 70 反 (7)	アール 40 反 (4)	人 男 2 女 1	0.5 —	頭 2	頭 2	頭 1	頭 15

B 酪農施設

サイロ	カッター	畜舎	附属設備 尿溜	附属設備 堆肥盤
1.5m×3m (5尺) (10尺) 2基	吹上 1基	16.5m² (5坪)	2.4kl (13石)	22.1m² (7坪)

第2表 乳牛導入前後の比較

	27年度	30年度	32年度
飼養家畜	馬 1 肉豚 1 繁殖豚 1 兎 2 鶏 10	役牛 1 肉豚 2 繁殖豚 1 山羊 1 鶏 5	搾乳牛 2 育成牛 1 繁殖豚 2 仔豚 13
厩肥	26トン (7,000貫)	41トン (11,000貫)	56トン (15,000貫)
金肥	53,760円	84,454円	52,450円
畜産収入	39,000円	128,000円	349,000円
支出	21.000円	30,800円	60,460円
差引	18,000円	97,200円	288,540円

保持に務めております。従つて販売量は六、七八〇キロ(三六石二斗)で一升当たりの乳価が四五円ですので、一八万二、五〇〇円となります。ですから乳代に対する購入飼料代の比率は三二・六%、今生産乳量全部を換金いたしますと二〇・八%の購入飼料率となります。

五 酪農を取り入れ改善されたこと

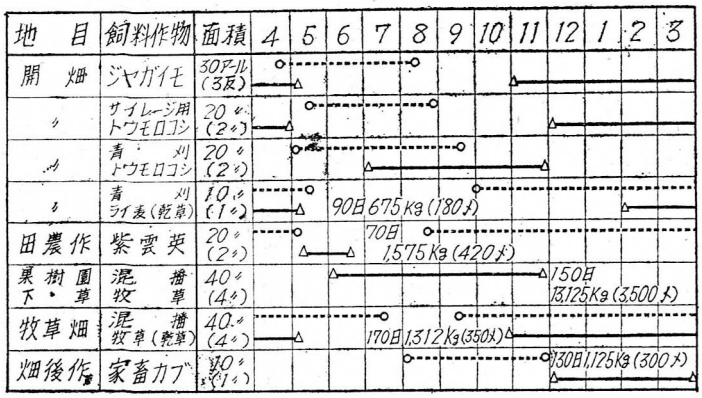
三十二年度の水田反収は三石六斗と上昇し、二十七年と比較して、金肥はほぼ同量であるのに金額において一一万円の増収となりました。これは二倍以上の自給肥料を増産してこれを利用したことに原因があると思います。畜産収入の増加したことは、すでに第一表で述べた通りであります。また果樹におきましては十三年生のリンゴがかなりの成績を収めました。これは下草を牧草化したことによる草生栽培の効果があらわれ、落果も少なく、品質もよく、他のものに比し一～二割高く、反当四〇〇貫で四万円、計一〇万円の収益をあげました。

六 グループ活動(会員八名)

三十一年酪農を部落に取り入れるに当つて私共はまず、研究会を組織して各種活動を行なつてきました。(1)雑木林を三二〇アール(三町二反)を開墾し、オーチャード、ラディノクロバー、レッドクロバー、イタリアンライグラスを播種(三十三年九月)しました。(傾斜二〇度～三〇度、土質は赤土、粘質、pH三～四)(2)乳牛の導入を行ない、本年十一月に二頭、十二月には一〇頭の予定です。(3)集乳所を建設いたしました。一五坪の建物を三七万五、〇〇〇円(八割は融資補助、二割は自己負担)で完成いたしました。(4)大森農協酪農部主体の研究会にも参加し、各種の活動をしております。主な活動は犢牛の処理、草地の改良及び指導講習、乳質改善等の事業に参加し活動しております。

七 今後の問題

大きな問題としては第一に上げなければならないことは裏作を合理的に利用することと思い、目下その計画中です。現在裏作



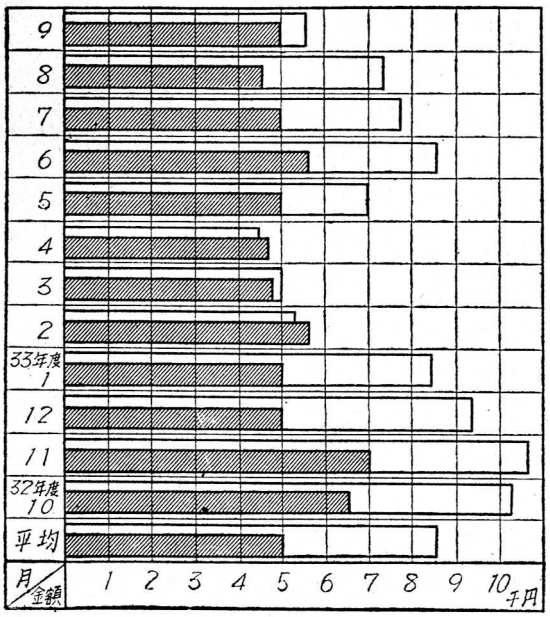
第3図 飼料作物作付表 (昭和33年度 1反=10アール)

第4表　自給と購入飼料の月別給与量

(1貫=3.75 kg)

	作物名＼月別		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
A 自給飼料	牧草	(kg)	—	—	1,312	1,312	1,312	1,312	1,312	—	—	—	—	—	6,560
		(貫)	—	—	350	350	350	350	350	—	—	—	—	—	1,750
	レンゲ草	(kg)	787	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	787
		(貫)	210	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	210
	青刈ライ麦(乾草)	(kg)	165	—	—	—	—	—	—	—	165	165	165	165	990
	牧草(同)	(貫)	44	—	—	—	—	—	—	—	44	44	44	44	264
	青刈トウモロコシ	(kg)	—	—	—	—	562	562	562	561	—	—	—	—	2,375
		(貫)	—	—	—	—	150	150	150	150	—	—	—	—	900
	サイレージトウモロコシ	(kg)	675	—	—	—	—	—	—	—	675	675	675	675	2,375
		(貫)	180	—	—	—	—	—	—	—	180	180	180	180	900
	ジャガイモカブ	(kg)	300	—	—	—	—	—	—	300	300	300	300	300	1,800
		(貫)	80	—	—	—	—	—	—	80	80	80	80	80	480

	作物名＼月別		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
B 購入飼料	麦ヌカ	(kg)	45	30	—	—	—	—	—	60	45	45	30	31.5	292.5
		(貫)	12	8	—	—	—	—	—	16	12	12	8	10	30
	乳配2号	(kg)	30	—	—	—	—	—	—	—	—	15	45	22.5	112.5
		(貫)	8	—	—	—	—	—	—	—	—	4	12	6	30
	ラクフード	(kg)	15	—	—	—	—	—	—	39	30	30	—	15	129
		(貫)	4	—	—	—	—	—	—	10.5	8	8	—	4	34.5
	荻	(kg)	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17.7	—	39.3
		(貫)	5.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	10.5
	麩	(kg)	—	75	90	75	75	90	60	—	—	—	15	15	495
		(貫)	—	20	24	20	20	24	16	—	—	—	4	4	132



第4図

第5表　水田による比較

	面積	反収	総収量	金額	田のみに使用した購入肥料	裏作
	アール	石	石	万円	円	
昭和27年	190	3.0	59	59	33,000	なし
昭和32年	190	3.6	70	70	32,000	レンゲ草
差	0	0.6	11	11	1,000	

第6表　自給肥料の比較

	厩肥	
	水田使用量	反当施肥量
	貫	貫
昭和27年	7,000	370
昭和32年	15,000	780
差	8,000	410

としては二反歩行なっておりますが、まだ八反歩の裏作利用可能地があり、これをライ麦、レンゲ草を取り入れるとすれば五、六〇〇貫くらいの収穫が上がり、馬鈴薯後作のカブでは反当り一、〇〇〇貫くらい上がると思われます。また畦畔草の利用により年九〇〇貫くらいの利用ができます。このような飼料を利用することにより二頭の成牛が飼育できるものと思われ、この点が今後の大きな問題と思います。

附表

1 一般概況

家族構成　男四、女五

耕地内容　水田約二町、蔬菜畑二反
果樹園四反、飼料畑七反
牧草地四反、採草地四反
計　約四町一反

家畜　乳牛成牛二
繁殖豚　二
育成豚　一
仔豚　一五

2 動機及経過

動機

イ　父の残した借金を返済するための収入増加

ロ　地力の増進

ハ　食生活の改善と家族の健康保持

経過

二十六年経営主となる。